

添付資料6: NIPDEPパイロット・プロジェクト逸話集

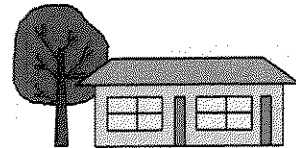
NIPDEPにおいてパイロット・プロジェクトの実施中、調査団メンバーは、モニタリングのためにパイロット県のプロジェクト・サイトを訪ね、タスクフォース・メンバーや、校長や教員、住民の皆さんから、パイロット・プロジェクト中の様々な出来事について話を聞くことができました。こうした話の中には、プラスであれ、マイナスであれ、予期せぬインパクトや、他のプロジェクトで役立つ教訓が隠されていることが多く、調査団ではこれらの話を集めてこの「逸話集」を作成しました。ここには、NIPDAP最終報告書本文では紹介していない楽しい話、暖かい話、考えさせられる話、いろいろ学べる話などを集めており、この報告書を読んでいただく皆さんに、パイロット・プロジェクトの現場の生の声や出来事を身近に感じていただければ幸いです。

1. 住民側のリーダーシップと協力で山の上に教室が完成。

県： カタベイ

TF1： 初等学校教室建設プロジェクト

実施期間： 2003～2004年



カタベイは、NIPDEPのパイロット・プロジェクトで、ムワサ初等学校の教室建設を計画した。これは、ムワサの既存の教室が老朽化していることに加えて、ムワサが山頂にあって、車ではアクセスできず、2kmの山道を歩いて上がらなければならないので、これまでどのドナーやNGOも新しい教室を立てることを支援してくれなかったためだった。NIPDEP調査団は、パイロットの案件形成から実施まで、主導権は各県行政官にあるとしていたから、ムワサの教室建設に合意した。ただ、NIPDEPのパイロットは、予算管理上、2003年の6月に着工して、11月までに完成することが求められていたため、NIPDEP調査団としては大きな不安を抱きながらの合意であった。



開始早々、山頂に建設用の水がないことが問題になった。このままでは、コントラクターと住民ボランティアは、谷底の川で水を汲んで、山頂まで運ばなければならない(右写真)。そこで、タスクフォースのメンバーは相談をして、教室建設に先立って、当初の予算計画では自分たちのモニタリング時の日当に当てようとしていた資金の一部を使って、セメントを20袋購入し、ムワサに浅井戸を建設した。山頂に井戸ができたお陰で、教室建設工事に携わる人たちは大いに助かった。しかし、ムワサの教室建設にはもうひとつ大きな問題があった。建設用の材料や資材を山頂まで運ばなければならない。自動車が使えないため、コントラクターや住民ボランティアが、2kmの山道をセメント袋等を背負って登るしかない。こうした作業に時間がかかり、プロジェクトの進捗は大幅に遅れた。



し遂げたことへの満足感と自信が生まれた。

こうした中であって、カタベイのコミュニティ開発行政官で、このプロジェクトのリーダーを務めるマタヤタ氏は、建設用資材を運ぶに当たって住民を励まし、NIPDEPの資金を有効に活用して、ムワサの子供たちに教室を作ることの重要性、そしてそのために皆が協力することの必要性を強く訴え続けた。こうしたマタヤタ氏のリーダーシップによって、住民は力を合わせて資材を運び、山頂での建設が進められた。そして、スケジュールは多少遅れたものの、ついにムワサの教室は完成した。住民やタスクフォースのメンバーの間には、自分たちで協力してプロジェクトを成

2. 住民の自助努力により施設が追加建設された。

県： カタベイ

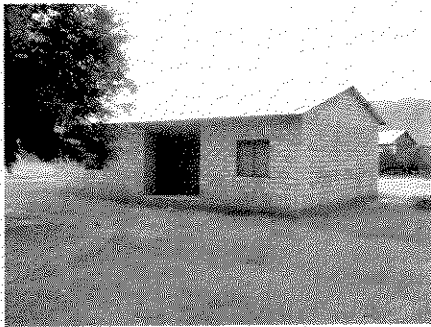
TF1 & TF3： 初等学校教室建設プロジェクト

実施期間： 2003～2004年



カタベイでは、マウラ中等学校（CDSS）とチカレ初等学校にもNIPDEPパイロット・プロジェクトによって教室を建設した。カタベイの住民たちは総じて教育熱心で、タスクフォース・メンバーも自分たちの役割と責任を理解し、カタベイの県教育マネジャであるバンダ氏のリーダーシップの下で教育改善のために力を合わせた。建設された教室は、子供たちの学習の場として重要であるとともに、住民たちによってコミュニティ活動に活用されている。

マウラ中等学校とチカレ初等学校の学校運営委員会とPTAのメンバーは、NIPDEPのパイロットで教室を建設した後に、プロジェクトをひとつやり遂げたことで自信が付き、また熱意が高まって、自分たちで資金を集めてさらに新しい教室を建設し始めた。新たな教室を建てる場合には、施設だけでなく教員が必要となるし、机や椅子、教科書も必要となる。現在、教室は建設中であり、彼らはパイロットで学んだことを実践しながら、こうした課題を解決するために協力して作業を進めている。



ウシスヤ中等学校（CDSS）では、パイロットで理科実験室を新設した。パイロットでは、住民ボランティアたちは数千個の土セメント・ブロックを造り、また住民の一部が資金を出して作業員も雇った。地域住民は、自分たちで協力して理科実験室を建設したことで、CDSSの施設整備の重要性を理解し、これまで学校になかった職員室を自分たちで建設することを決定した。土セメント・ブロック製造用の機材を借りて、ブロックを作り、地域内にある廃屋となった病院施設から屋根用の鉄板と窓枠を調達して、ついに二部屋と倉庫を持つ職員室が完成した（左写真）。

3. 窓ガラス盗難事件が住民の強い結束を生んだ。

県： カタベイ

TF3： 中等学校教員宿舎建設プロジェクト

実施期間： 2003～2004年



カタベイのサンガ地区では、NIPDEPパイロット・プロジェクトによって中等学校（CDSS）の教員宿舎が建設された。住民も協力したものの、慣れない建設プロジェクトであったため、1年次では建設が完了せずに、2年次のフォローアップ・プロジェクトでやっと宿舎が完成した。しかし、タスクフォースや住民たちが、教員が宿舎に入るのを待ちわびていたところ、その直前に、宿舎の窓ガラスが全て盗まれてしまった。

この事件は、県行政機関に報告され、捜査が行われたが、犯人は見つかっていない。ここで、従来の県教育事務所ならNIPDEP調査団に追加支援資金を要請したかもしれない。しかし、今回は違った。自分たちのプロジェクトに誇りをもったプロジェクト管理チームやタスクフォース、そして県行政機関のメンバーは、盗難の状況を調査して報告書に取りまとめてNIPDEP調査団に提出した。その報告書には、今後の対策として、学校運営委員会や県開発基金の予算を使って窓ガラスを新たに購入すること、教員を早期に宿舎に入れて、盗難対策を住民も協力して強化することが書かれていた。

窓ガラスの盗難事件は、サンガ CDSS には不幸な出来事であったが、こうした経験を契機に、住民や県行政官のプロジェクトに対する結束、オーナーシップが高まるという成果につながった。

4. 建設プロジェクトへの住民参加のアウトプットが学校の資金集めに。

県： チシ
TF4： 初等学校教員宿舎建設プロジェクト
実施期間： 2003～2004年



チシでは、NIPDEP パイロット・プロジェクトで初等学校の教員宿舎を建設した。同県では DFID の支援によって大規模な校舎建設プロジェクトが実施中であったが、DFID の校舎建設プロジェクトでは教室は建てるが、教員宿舎は建設されない。当初計画では、プロジェクト管理チームとタスクフォースの調整により、DFID が教室を建てる学校に NIPDEP パイロットで教員宿舎を建て、県行政官主導による NIPDEP と DFID の連携プロジェクトのモデルとなることが期待されていた。

NIPDEP のタスクフォースは建設に使う石集めに住民を動員し、住民の協力により十分な石が集まった。しかし、住民たちは NIPDEP プロジェクト用に集めた石を DFID の校舎建設プロジェクトに売ってしまい、その売り上げを学校の運営資金に寄付してしまった。住民たちは、自分たちの協力で集めた石が学校資金集めに役立ったことで意気が上がり、引き続き、NIPDEP 用に石を集め始めた。結果として、住民は自分たちの地域内で行われるプロジェクトに必要なでかつ身の回りで入手可能な原材料を全て集めることに成功し、DFID 教室建設も NIPDEP パイロットの教員宿舎も完成した。また、住民参加のアプローチによって、生計向上につながることも経験した。

しかし、材料集めが遅れたために NIPDEP プロジェクトによる教員宿舎の完成は遅れてしまった。プロジェクト運営の視点から見ると、DFID プロジェクトと NIPDEP の間の連絡の不徹底や、住民参加の目的やタイミングがきちんと話し合われていなかったことなどが問題であったが、住民の間でのエンパワメントには成果があったと言える。また、チシのタスクフォースは、ドナー支援案件の調整を進める上で、さまざまな教訓を学ぶこととなった。

5. 建設資材を盗難から守るために住民が一致団結。

県： チシ
TF4： 初等学校教員宿舎建設プロジェクト
実施期間： 2003～2004年



NIPDEP の建設パイロット・プロジェクトでは、タスクフォースと住民ボランティアが協力して、調達した建設資材が盗まれないように保管し、見張りを行う必要があった。このため、NIPDEP 調査団は、タスクフォースに対して、建設資材は校長の宿舎か教室など鍵がかけられる建物に保管するよう助言を行った。

NIPDEP 調査団では、チシのタスクフォース 4 の教員宿舎建設プロジェクトを視察したときに、建設資材が屋外に放置されているのを発見した。「なぜ助言に従わないのか」とタスクフォースに尋ねたところ、「建物の中にしまいたいのだが、この学校にある 2 つの教室のうち 1 つはドアが壊れていて、もう 1 つの教室は窓が壊れている。この場所に放置しておくことがわれわれにとって最善の策である。この場所は、3 軒の家のちょうど真ん中であって、建設資材は 3 軒の家のメンバーによって見張られているし、3 軒同士もお互いを見張ることができる。さらに、建設資材を見張るための警備員も雇用した。」という回答が返ってきた。

結果として、建設資材は安全に保管され、教員宿舎は完成した。住民たちの協力は成功裏に終

わった。しかし、これはあくまで特殊な事例で、どこにも複数の住民が協力して見張る場所があるわけではないので、NIPDEP 調査団としては、建設資材は鍵のかかる建物に保管されることを進めている。

6. 学校運営委員会が自分たちの力で教員宿舎建設へ。

県： チシ
TF2： 学校運営委員会研修プロジェクト
実施期間： 2004 年



チシのパイロット・プロジェクト 2 は、各学校の PTA や学校運営委員会、さらに住民に対して、彼らが学校運営に参加するに当たって必要な考え方、知識やスキルを提供することを目的として、1700 人を対象に 4 日間のトレーニングを行った。トレーニングでは、学校運営委員会の機能やマネジメントに焦点を当て、メンバーや住民がどのように関与すべきかを示し、グループ毎にアクション・プランを作成した。

自分たちがどのように学校運営に関わるかを考え、自らアクション・プランを作成したことで、参加者の多くは、チシ県内で実施されている他の NIPDEP パイロット・プロジェクトにより関心を持つようになった。例えば、学校運営委員会では、DfID による教室建設の対象学校に対して、教員宿舎建設の支援を行ってくれるようドナーや NGO に対する働きかけを始めた。

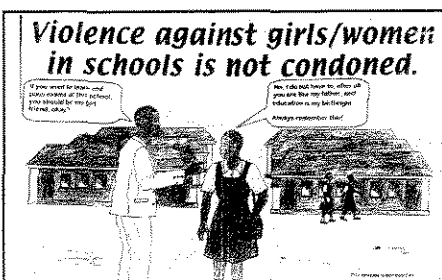
このプロジェクトのタスクフォースでは、PTA 及び学校運営委員会に対して、開発活動の維持管理を強化し、持続性を高めるためのマニュアルを作成した。このマニュアルは、県教育事務所が所有し、今後、県内で実施される啓発活動で活用される予定である。

7. ジェンダー研修のために行政官、住民、政府機関、NGO が協力を強化。

県： ムチンジ
TF6： 初等教育における女子教育推進プロジェクト
実施期間： 2004 年



ムチンジのパイロット・プロジェクト 6 では、女子の就学率向上に焦点を当てて、ジェンダーに関する啓発活動を行った。啓発キャンペーンの会合には、全県 11 学区から、学生、教員、住民リーダーたち 790 人が集まった。このプロジェクトで特筆すべき点は、様々なレベルのステークホルダーの対象者が協力し合ったことである。タスクフォースは、県教育マネジャ、ジェンダー省、全国市民教育イニシアティブ (NICE)、人権関連 NGO であるウィメンズ・ボイス、ユース・アソシエーションなど、女子教育に関連があると考えられ、ムチンジに拠点を置く全ての組織を対象にファシリテーターを選出した。



タスクフォースでは、ジェンダー省やファシリテーションの専門家の協力を得て、テキストやポスター、パンフレットなど、女子就学率向上の重要性を訴える研修と啓発のための教材 (左ポスター・サンプル参照) を作成した。タスクフォースのリーダーであるチンコタ氏は、「研修後、これらの教材は、県教育マネジャや県コミュニティ開発オフィサーによって活用され、来年は自分たちでジェンダー啓発研修を行っていく予定である」と述べている。

ジェンダー省では、このプロジェクトに協力する以前は、ジェンダー関連の事項を「全般的視

点」からのみ取り扱っており、女子の就学率促進など具体的な事項に焦点を当てたことはなかった。また、県教育事務所も女子教育推進のための教材を持たなかった。

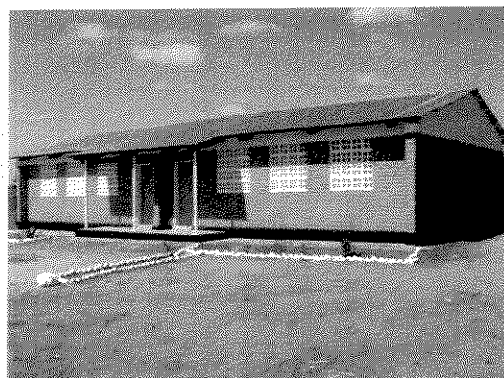
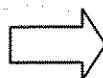
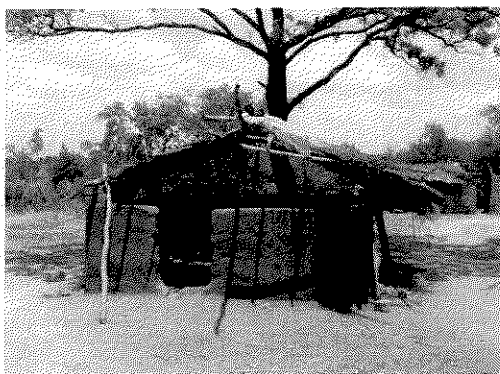
パイロット・プロジェクトが終わって、タスクフォースでは、全ての活動や成果に関連する資料をレポートに取りまとめ、教育事務所に提出した。これらの資料は、ムチンジ県内やジェンダー省で活用できるだけでなく、他県でも、ジェンダー啓発関連活動を行う際に活用が期待される。

8. 住民の協力で教室建設がスケジュールどおりに完成。

県： ムチンジ
TF1： 初等学校教室建設プロジェクト
実施期間： 2003～2004年



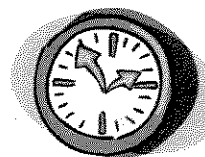
ムチンジ県のパイロット・プロジェクト1では、カンバンダ初等学校の教室建設を行った。カンバンダ初等学校では、これまでぼろぼろに壊れた建物（下左写真）で授業を行っており、教室と呼べるものはなかった。このため、教員も、両親も、住民メンバーも、皆が新しい教室を建てることを待ち望んでいた。彼らは、カンバンダがプロジェクトの対象に選ばれたことを非常に喜び、教室建設に積極的に協力した。例えば、教室建設には大量の水が必要だが、学校近くの井戸の手押しポンプは壊れており、水をくみ出すことができなかった。このため、タスクフォースに動員された住民たちが、地域の井戸から建設サイトまで水運びを手伝った。手押しポンプが修理された後も、学校周辺の主婦たちが、手押しポンプから工事現場までの水運びを手伝った。



タスクフォース、学校運営委員会、そして住民たちの協力により、建設作業は順調に進められ、予定通りに新しくきれいな教室とトイレが完成した（上右の写真）。これらの施設が完成したことに加え、プロジェクトの成果として、県行政官や住民メンバーの間に、プロジェクトや学校施設に対するオーナーシップと、強いチームワークが生まれた。

9. 県行政官のプロジェクト管理能力と意識が向上。

県： ムチンジ
県プロジェクト管理チーム
実施期間： 2003～2004年



ムチンジでは、NIPDEPのパイロット・プロジェクトを実施して、これまで行政官や住民があまり意識してこなかった「時間や期日を守ること」、つまりスケジュール管理の重要性が認識されるようになった。

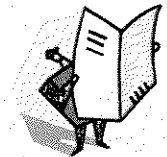
県の環境行政官のカルワ氏と県教育マネジャのガイヤエ氏は、NIPDEPプロジェクトの成果の一

つに、行政官や住民リーダーがプロジェクト管理の重要性を理解したことを挙げている。様々なプロジェクトを実施することによって、スケジュール管理のほかに、予算管理、建設プロジェクトにおける住民参加、地域の人的資源（建設技術専門家など）の活用の重要性、効果を体験した。

カルワ氏によると、ムチンジ県では、スケジュール通りに完成したトイレ建設プロジェクトで学んだノウハウを、他の井戸建設及び衛生向上プロジェクトに活用した。また、予算管理の基礎を学んだことにより、透明性の重要性が理解でき、さらに節約した予算で、追加の活動を行うことも可能になった。

10. USAID 支援 MESA プログラムとの連携で効率的に啓発キャンペーンを実施。

県： マチンガ
TF1： 教育啓発キャンペーン
実施期間： 2003～2004年



マチンガのタスクフォース1は、出席率を向上させるための教育啓発キャンペーンを実施した。マチンガでは、米国 USAID の支援でセーブ・ザ・チルドレンがマラウイ教育支援活動（MESA）プログラムを実施中である。MESA プログラムでは、県内の10ゾーン（学区）内に3～4校の初等学校からなる33のクラスター教育委員会（CEC）が設置された。CECのメンバーは、チーフ、学校長、保護者である。

NIPDEP パイロット・プロジェクトのフェーズIでは、CECは、保護者及び生徒の意識や態度に関して行った調査結果に基づいてアクション・プランを作成した。このアクション・プランには、「児童の欠席率を低下させる」、「女子中退者数を減少させる」、「保護者が子供を学校へ送るよう奨励する」などの目標が盛り込まれた。このアクション・プランを実施するためのキーパーソンは、伝統的住民リーダー（Traditional Authority）と村長である。タスクフォースでは、12人の伝統的住民リーダーに支援を求め、合意を得た。次に、タスクフォースと伝統的住民リーダーで村長を訪問し、地域全体がプログラムに参加するように協力を求めて活動を広げた。



パイロット終了後のインパクト調査によると、あるクラスターの就学者数が2003年には9,068人であったが、2004年には9,777人に増加した。別のクラスターでは11,149人から11,368人に増加した。ミチョンペ・クラスターでは、2004年には約3分の1の生徒が中退したが、2005年には中退者数が激減した。これは、クラスター・リーダー（村長）が子供を学校にやらない保護者には罰金を科すという規則を導入したことによる。ナペリ・クラスターでは、CECメンバーが児童の出席率をモニターし、児童が一週間以上欠席した場合には、家庭訪問をして保護者に子供を学校へ送るよう指導した。さらに、パイロット・プロジェクトでは、クラスターに一台ずつ自転車を提供し（上写真）、CECメンバーが住民の啓発改善活動の進捗をモニターし、指導する仕組みを導入した。

11. 県行政官の学習プロセスとしての NIPDEP パイロット・プロジェクトの役割。

県： マチンガ
TF3： 中等学校（CDSS）向け現職教員研修
実施期間： 2003～2004年



マチンガのタスクフォース3は、2フェーズに亘り、中等学校（CDSS）の教員255名を対象に

研修を行った。フェーズ1の実施から多くを学び、そこで得られた教訓に基づいて、フェーズ2では研修ニーズの把握、研修生や指導員の選択、指導員研修、研修コースの運営、モニタリング及び評価のそれぞれについて改善し、研修の質の向上に努めた。



メンバーは、NIPDEPパイロット・プロジェクトの終了後も自分たちだけで研修が実施できるとの自信を持つことができた。

タスクフォースのメンバーは、教育ディビジョンの行政官との連携も重視した。例えば、中等教育教授法アドバイザー (SEMAs) は、研修中は、ファシリテーターのリーダーを務め、彼らの人件費は教育ディビジョン事務所が負担した。さらに、ディビジョン・マネジャを研修コースの開会式に招待し、彼女は、開会式の挨拶 (上写真) で、学校教育の質を改善する上での教員の重要な役割を強調した。タスクフォースのメンバーは、こうした研修コースの企画、運営の技術や知識を身につけたことによって自信をつけ、今後、自分たちで、県教育事務所や教育ディビジョン事務所と協力して、より多くの研修機会を提供していく方針である。

12. パイロット・プロジェクトを通してライフ・スキルを習得。

県： マチンガ

TF7： 中等学校 (CDSS) における生計向上活動

実施期間： 2003～2004年



マチンガのタスクフォース7は、県内の一つの中等学校 (CDSS) で生計向上プロジェクトを実施した。大部分のCDSSは、教員、教科書、施設の量・質において深刻な問題を抱えている。CDSSの学校運営を改善し、これらの課題を学校が自助努力によって少しでも解決できるような体制を整えることが同プロジェクトの目的であった。プロジェクトでは、学校敷地内に養殖池 (左写真) と鶏小屋を建設し、その収入を学校運営の足しにするとともに、生物や環境、水管理、さらにマーケティングなど実技を通じた学習のためのリソースとしても活用した。

養殖池の建設は、建設サイト、運営体制、養殖池の所有権などがなかなか決まらなかったために予定より大きく遅れた。2年間のプロジェクト期間の終了間際である2005年2月にじめての魚の収穫が行われた。一方、養殖池に窒素 (N) を補給するために並行して建設・運営された鶏小屋は、養殖池より早く軌道に乗ったため、学校では、2003年待つには鶏卵を販売して最初の収入を得ることができた。

このプロジェクトには、近隣で実施中のJICAの養殖関連の技術協力プロジェクトの日本人専門家及びローカル・スタッフにより技術支援が提供された。また、タスクフォースと対象

校の学校運営委員会は、水産省と密な連絡を取り、必要に応じて技術支援を受けてきた。今後もさらに、CDSSの学校運営委員会、教員や生徒、そして住民たちは、彼らから魚について、養殖や養鶏について、そして卵の販売、鶏と魚の関係、出納簿のつけ方や会計の方法について学びつつある。

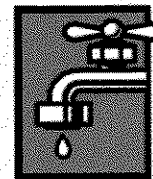
養鶏が今のところ順調であること、養殖の第1回の収穫がうまくいったことから、プロジェクト後半で、住民はパイロットの予備費を活用して新しい鶏小屋を建設した。マチンガのこのCDSSでは、鶏小屋と養殖池が学校改善の活動のための新たな資金源となりつつある。

13. 学校の衛生環境改善が女子児童の出席率の増加につながった。

県： マチンガ

TF6： 初等学校における衛生施設建設プロジェクト

実施期間： 2003～2004年



マチンガでは、初等学校のトイレ、井戸（右写真）等の衛生施設建設プロジェクトを実施した。パイロットによって建設された井戸は、学校だけでなく、近隣の地域住民も利用している。これにより、児童や教員、住民たちの水汲みの時間が大きく短縮された。

一方、トイレは、周辺住民の健康改善に寄与し、実際に学校周辺の下痢症発生率が減少した。同時に、新しくきれいなトイレが完成したことにより、女子児童たちの態度が少しずつ改善されてきた。女子児童の中には、トイレがきたなかったり、或いはトイレがまったくなかったりしたことが原因で、学校へ行きたがらない子供も多かった。新しいトイレができたことによって、女子の出席率が徐々に増加し、同時に、中退率が減少しつつある。

14. 地方分権化政策にNIPDEPの手順・ノウハウが役立った。

県： チョロ

県プロジェクト管理チーム

実施期間： 2003～2004年



マラウイ全国で地方分権化政策が進められており、チシでも他県と同じように来年度の予算計画作成に当たって、「活動に基づく予算計画手法」が採用された。県議会の開発プランニング・ディレクターであり、かつ県プロジェクト管理チームのリーダーであるカフカ氏によると、「チョロは他県に比べて、有利である。それは、新しい予算計画手法が、NIPDEPパイロット・プロジェクトのプロセスに似ており、自分たちはすでにそのノウハウを既に習得しているから。」ということであった。「2年間に亘るNIPDEPパイロットの実施プロセスで、プロジェクト・プロポーザルの書き方、案件の優先度付け、活動ベースの予算計画の策定方法を学んだ。またこうした活動を行うことによって、各分野を担当する中央省庁や県レベルの行政官、専門家の間で、分野を超えて協力を行うことができた。こうした協力はこれまで行われたことがなく、県レベルの地方分権化を進める上で貴重な機会となった。」

チョロでは、パイロット県の中でも特にパイロット管理チームの結束が強く、例えば、NIPDEP

パイロットのフェーズI終了後にはチーム・メンバー、コア・トレーナー、さらにベスト・プロジェクト賞を獲得したタスクフォース2のメンバーを招待して記念セレモニーが行われた。これによってフェーズ2や今後の教育開発活動に対する意欲がさらに高まった。

15. 学校に理科教材が整備され、先生にも生徒にも理科の授業がおもしろくなった。

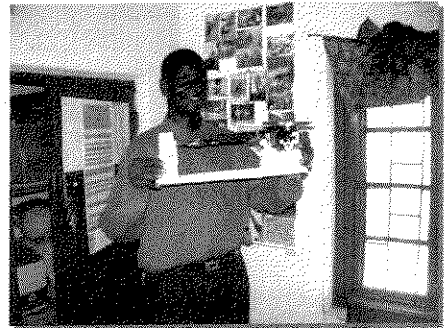
県： チョロ

TF5： 理科教材調達プロジェクト

実施期間： 2003～2004年



多くの中等学校、特に CDSS には理科教材が整備されていないことから、理科の授業はほとんどの学校で講義形式のみで行われている。実験などの実技がなければ、理科に対する生徒の関心や理解度は低いままとなる。チョロのタスクフォース5では、県内の CDSS 5校に理科教材を提供することにした。リホ CDSS の教員（右写真）は、「つい最近まで、ピーカーやフラスコの変わりに、プラスチック・ボトルやコップを使って実験を行ってきた。プロジェクトで理科教材が整備されたことから、理科の授業を行うことに自信が持てるようになった。これで、生徒の理科の理解度が向上し、より多くの生徒が中等学校卒業資格試験に合格するようになると期待している。」



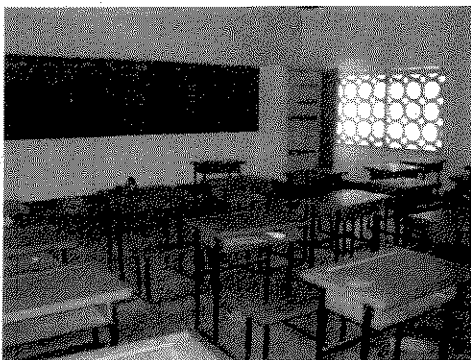
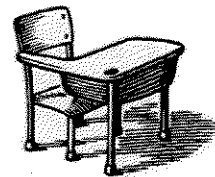
ただし、理科機材を提供するだけでは理科教育の改善にはつながらない。フェーズ1実施中に、タスクフォースは、理科教材を受け取りながらも、適切に活用していない学校があることに気づいた。教員たちは、理科教材を受け取った際に簡単な研修を受けていても、授業で実際にどのように活用すればいいのか理解していなかった。このため、フェーズ2では、理科教材の利用方法の研修を強化し、さらに、フェーズ1に理科機材を受け取った学校の教員にも研修を行った。こうして、教員は、生徒が十分な便益を得られるよう、理科教材を活用して理科の授業を行うようになった。

16. 机・椅子の整備を通して学校のセキュリティ強化。

県： サンジェ

TF1 & TF2： 学校家具（机・椅子）調達プロジェクト

実施期間： 2003～2004年



サンジェでは、施設や資機材が十分整備されていない学校が非常に多く、教室に机や椅子がないために子供たちが床に座って授業を受けているケースが多い。石やセメントの床の上に直接座ることは、衛生面からも問題点が多く、机や椅子がない学校では女子の中退率が高い。パイロット・プロジェクト1及び2では、中等、初等学校にそれぞれ机や椅子を調達して、学習環境や衛生面を改善して、女子の中退率を減少させることを目指した。

ただ、このプロジェクトの対象校を選ぶに当たって、タスクフォースは頭を悩ませた。フェーズ1では、家具のない、ニーズが高い学校を対象に選定したが、ここで、タスクフォースは、必ずしも「机や椅子がないこと」だけを選定基準にすることが適切とは限らないことを学んだ。パイロットの投入

を有効に使って効果を高め、持続性を確保するには、対象校を選ぶ際に、学校のセキュリティと維持管理体制をチェックすることも重要であることが分かった。

サンジェのディンデ初等学校は、学校の管理状況が悪くて教材や黒板などの資機材が盗まれる事件が頻発していた。同校の机・椅子整備のニーズは高いものの、タスクフォースは対象として不適切と判断した。フェーズ2では、ディンデ校の学校運営委員会のメンバーが、再度、タスクフォースに机と椅子の整備をする対象としてくれるよう強く要請し、同時に、学校のセキュリティと学校運営の改善に努力することを約束した。学校運営委員会は、PTAと協力して、調達される机と椅子の使用方法について、地域住民と契約を結ぶこととし、そのための規定を作った。同時に、学校の全ての教室や部屋に鍵をつけた。パイロット・プロジェクトの実施中、周辺住民たちは、学校の資産を維持管理し、セキュリティを強化すること、そのために自分たちが学校に協力することの重要性に徐々に気づき始めた。

タスクフォースの下、学校運営委員会やPTA、住民が協力することで、机や椅子が学校にきちんと整備されたことで、このプロジェクト以外にも予期せぬ波及効果が生まれた。同地域では、新しい学校を建設中であったが、周辺住民の協力が得られずに作業が止まったままだった。パイロットで自信が生まれ、また自分たちの協力の重要性を認識した住民たちは、この学校建設を再開し、今では、すでに新しい教室が完成し、机や椅子も入って、子供たちは改善された環境で学習が受けられるようになった。もちろん、学校のセキュリティや維持管理体制も強化されている。

17. タスクフォースと教育ディビジョン・プランナーの協力で効率よく理科教材を調達。

県： サンジェ
TF3： 中等学校（CDSS）への理科教材調達プロジェクト
実施期間： 2003～2004年



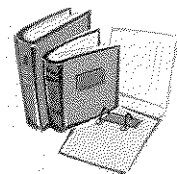
サンジェのタスクフォース3は、中等学校の中でも特に整備が遅れているCDSSの理科教育環境を改善するために、CDSSを対象とした理科教材調達プロジェクトを実施した。サンジェは、マラウイの中でも遠隔地に位置しており、試験管やピーカーなどはブランタイヤのサプライヤーから購入することができたが、購入した後に、これらの機材をブランタイヤからサンジェまで、でこぼこで整備されていない100kmの道を運ぶことが大きな問題となった。

また、試験管やピーカーなどを学校で保管するためのトローリーを購入する予定であったが、国内では販売されておらず、南アフリカから購入しなければならないことが分かった。国外から輸入することになると、マラウイ通貨（クワチャ）が弱くなっていたためトローリーの価格は予算よりかなり高くなる上に、硬貨（Hard Currency）を準備することが必要となり、また南アからの配送にもかなり時間がかかることが予想され、タスクフォースは頭を悩ませた。

そこで、教育ディビジョン・プランナー（コア・トレーナー）とタスクフォース・メンバーは、地域内の家具屋に依頼してトローリーを作ってもらうことにした。家具屋は理科教材保管のために特別な構造を持つトローリーなど作ったことがなかったが、教育ディビジョン・プランナーが、タスクフォースと協力しながらデザインし、家具屋を指導し、ついにトローリーを完成、CDSSに他の機材と共に調達することができた。トローリーの出来栄は予想以上で、ディビジョンと県の協力が高まった。また、この経験やノウハウは他のプロジェクトや他県でも応用できる。

18. 教科書リボルビング・ファンドを活用して1.5倍の教科書が購入できた。

県： サンジェ
TF4： 中等学校への教科書調達プロジェクト
実施期間： 2003～2004年





サンジェの教科書調達プロジェクトでは、タスクフォースが、これまであまり活発でなかったマッチング・ファンドを活用して、対象校の生徒から少しずつお金を集め、より多くの教科書が購入できるよう努力した。マッチング・ファンドは教育省によって数年前に導入済みであるが、どこの県でも適切に運用されていないのが実情であった。

サンジェのパイロット・プロジェクトでは、学校や地域住民を啓発し、教科書購入資金のためのマッチング・ファンドを集めるために動員した。こうして教科書リボルビング・ファンドとして集められた資金を利用して、タスクフォース4では、当初計画していたよりも1.5倍の冊数の教科書を購入することができた。

19. パイロットは住民の宗教心にもプラスの効果を与えた。

県： サンジェ
TF7： 初等学校教員への研修プロジェクト
実施期間： 2003～2004年



初等学校校長と教頭に対して行われた研修プログラムの最後に、新任の校長が、研修の閉会に当たってのお祈りのリード役を務めるように依頼された。彼は、これまであまり熱心な信者ではなかったことから、正式なお祈りを知らず、参加者が期待したものとは異なったお祈り（というより閉会のあいさつ）を始めた。お祈りの中で、彼は、「私は、カレッジ卒業以来、研修に参加することができなかった。県教育マネジャには、私がこの研修に参加できるようにしてくれて非常に感謝している。MIE 指導による研修は有益であったし、このような機会を与えてくれた NIPDEP や JICA、タスクフォースに大いに感謝する。」と述べた。

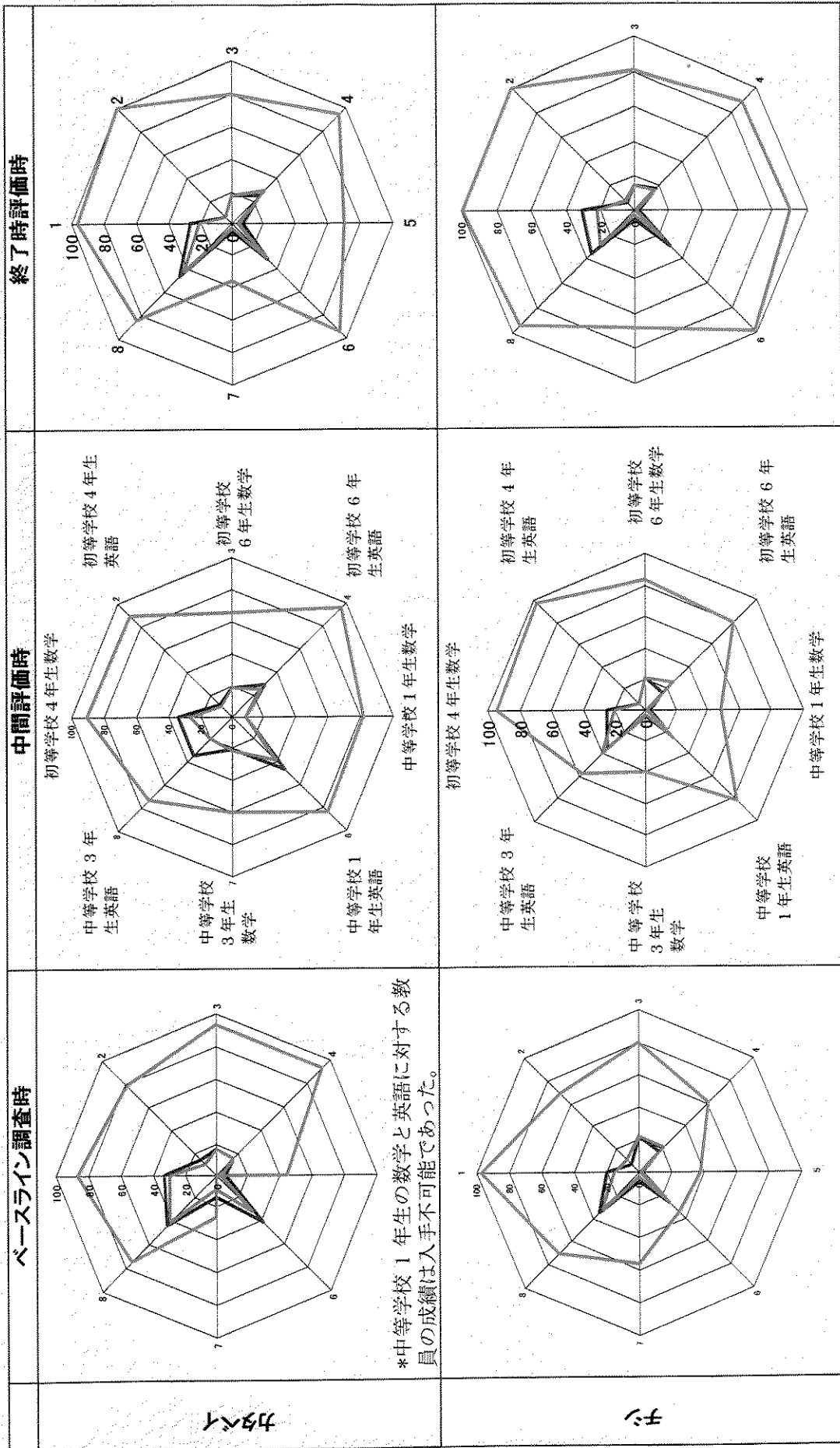
彼は「アーメン」という代わりに、「サンキュー」で挨拶を締めくくり、さらに、「校長としての学校運営や教員としての教授法を強化するだけでなく、こうした機会を与えてもらったことに感謝して教会へきちんと通うことにする。」と付け加え、参加者一同の微笑みにつながった。マラウイでは、信心深いキリスト教徒が多く、校長を信心深い方向に導いたというこの逸話は、マラウイの NIPDEP 関係者にとって印象深い話となっている。

こうした逸話を通じて、県レベルの行政官や住民が、教育改善プロジェクトに、計画作成や意思決定、実施段階で主体的、積極的に関わることで、自信やオーナーシップが生まれること、リーダーシップの強化につながるなどが生き生きと伝わってくる。まひとつのことを協力して成し遂げたことによって、セクターを越えた行政官の間で、行政官と学校や住民の間で、ディビジョンと県の行政官の間でより強い結束が生まれたケースも印象的である。

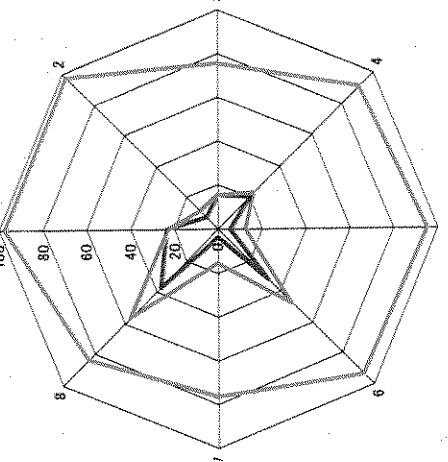
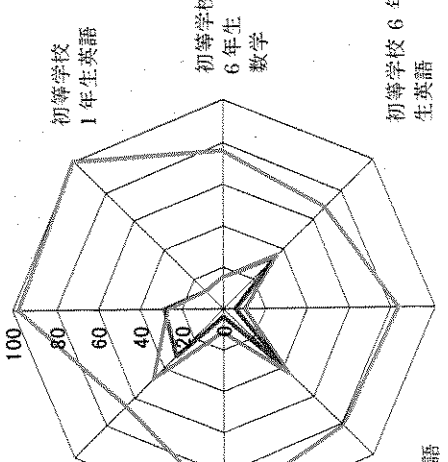
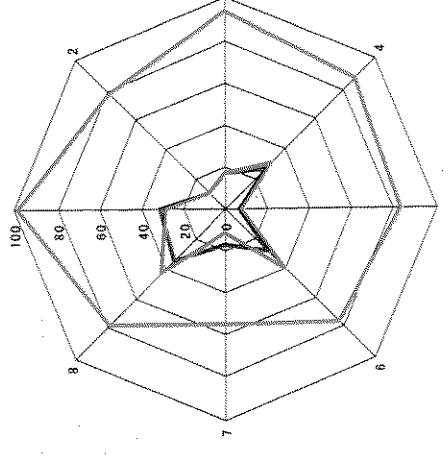
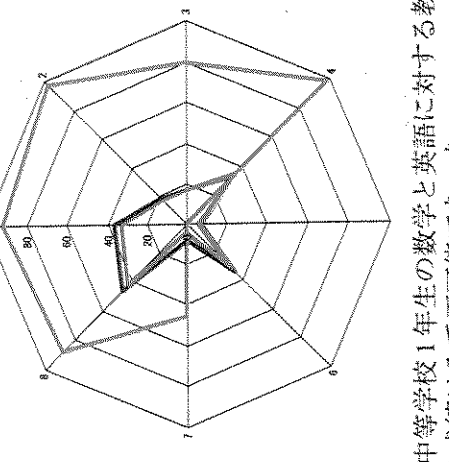
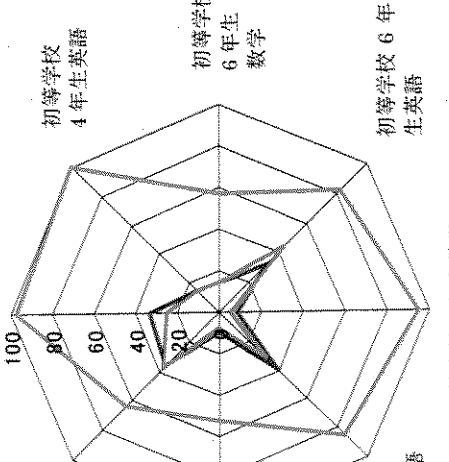
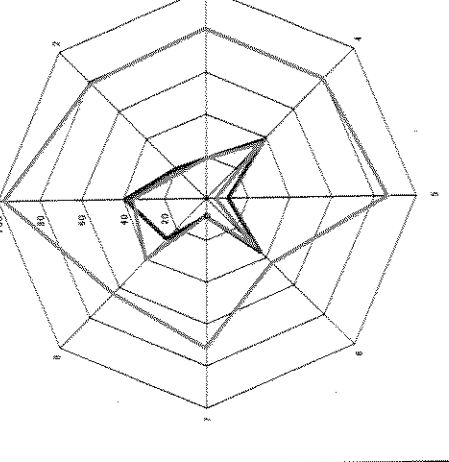
ここに挙げた逸話のごく一部であり、NIPDEP 調査団が集めることのできなかった話ももっとたくさんあるものと思われる。今後も、これらの逸話の中に示されたような NIPDEP パイロット・プロジェクトで得られた経験やノウハウを生かし、地域の人々が中進となって活動が続けられ、子供たちが皆、質の確保された初等・中等教育にアクセスできるようになることを心から願う。

2005年9月

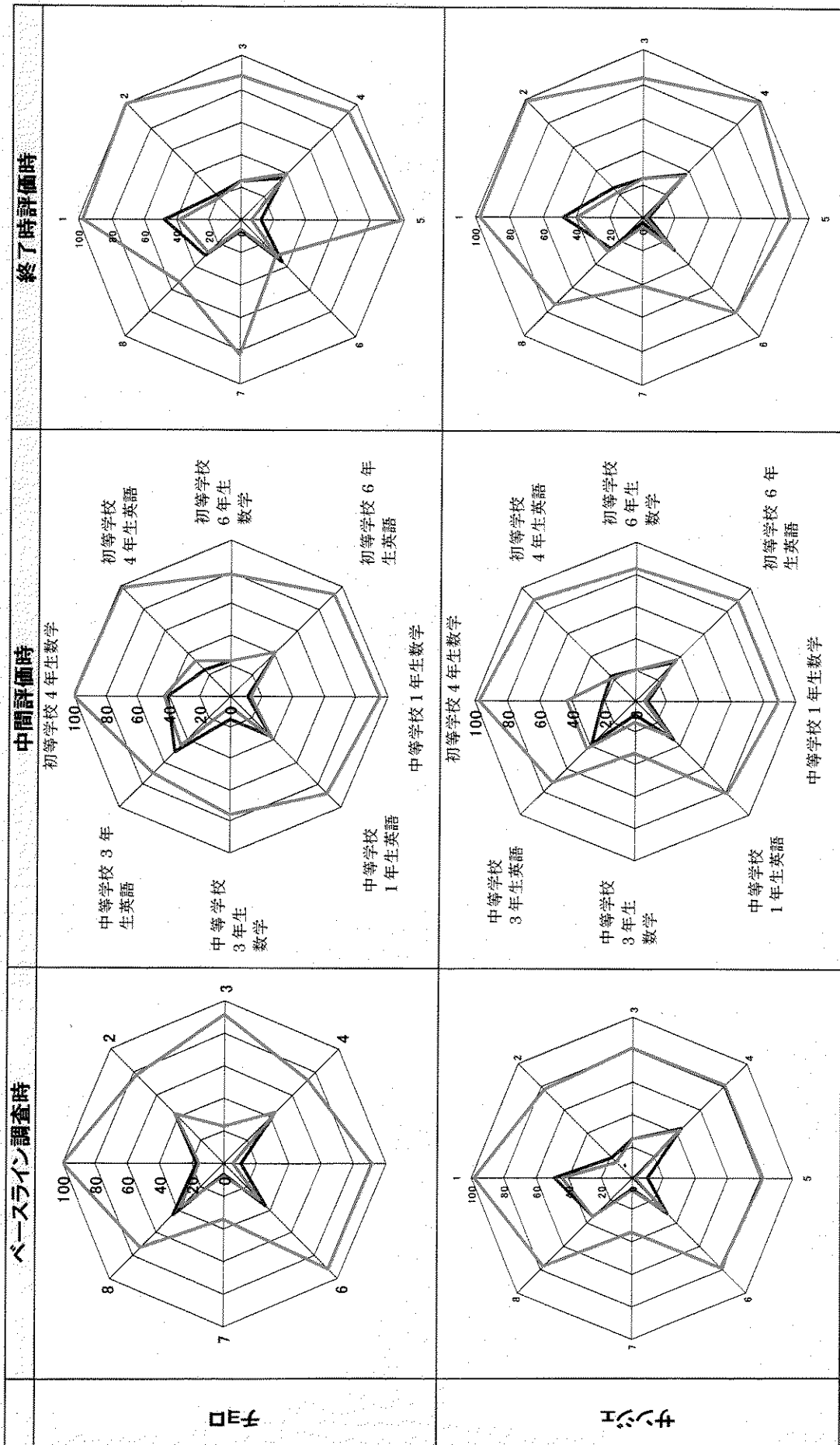
添付資料 7: 達成度テストの結果 (レーダーチャート)



注: ——— 青線は男子児童/生徒 ——— 赤線は女子児童/生徒 ——— オレンジ線は教員の成績をそれぞれ示す。

	ベースライン調査時	中間評価時	終了時評価時
<p>男子児童</p> 	 <p>中等学校 3 年生 英語 中等学校 3 年生 数学 中等学校 1 年生 英語 中等学校 1 年生 数学 初等学校 4 年生 数学 初等学校 1 年生 英語 初等学校 6 年生 数学 初等学校 6 年生 英語</p>		
<p>女子児童</p> 	 <p>中等学校 3 年生 英語 中等学校 3 年生 数学 中等学校 1 年生 英語 中等学校 1 年生 数学 初等学校 4 年生 数学 初等学校 1 年生 英語 初等学校 6 年生 数学 初等学校 6 年生 英語</p>	 <p>*中等学校 1 年生の数学と英語に対する教員の成績は入手不可能であった。</p>	

注：青線は男子児童/生徒、赤線は女子児童/生徒、オレンジ線は教員の成績をそれぞれ示す。



注：青線は男子児童／生徒、赤線は女子児童／生徒、オレンジ線は教員の成績をそれぞれ示す。

